

二〇一九年五月三一日

せせらぎの涼しく奏づ詣で道
漣に植田の風の見えにけり
微かなる木々のそよぎや池涼し

菜々
こすもす
やよい

二〇一九年五月三〇日

車椅子押して寄せたる若葉陰
濃紫陽花山の樹間を埋め尽くし
青鳶を御手に絡ませ六地藏

満天
素秀
ぼんこ

二〇一九年五月二九日

万緑の丘を一望道の駅
あひたがひ釣り具自慢や鮎の宿
大仰に風をいなして今年竹
流水を仏と祀る寺涼し
大橋を見上ぐ露天湯明易し

ぼんこ
宏虎
宏虎
なつき
やよい

二〇一九年五月二八日

雨弾きをる枇杷の実の産毛かな
まなかひに朝焼の富士露天の湯
瀬しぶきに光る一筋蜘蛛の糸
さみだるる四囲の翠黛滲ませて

素秀
智恵子
さつき
菜々

二〇一九年五月二七日

潮干狩り迷い子を告ぐるスピーカー
小流れを狭む汀の花菖蒲
そら豆の莢の無垢なる白さかな
松の芯大空指して鬨ぎあふ
山上のキャンパスフェスタ囀れる

智恵子
さつき
たか子
ぼんこ
はく子

二〇一九年五月二六日

今年竹もろ肌脱ぎに皮つけて
素麺をすすする老舗の江戸切子
巣燕のちぎれんばかり首伸ばし

明日香
智恵子
さつき

二〇一九年五月二五日

浜木綿を籬としたる島食堂
木下闇五百羅漢の苔むして

智恵子
はく子

毎日句会みのる選・二〇一九年六月二日